氏　　名	呉　帝彦
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第 86 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	漆素材を生かした媒介イメージ
審査委員	主査　教授　栗本　夏樹
	教授　宇野　茂男
	准教授　深谷　訓子
	准教授　安井　友幸
	講師　大矢　一成

論 文 の 要 旨

作品の表現は「考え」、「素材・技法」、「形」の要素が互いに関係しあって完成されると考える。しかし、これらが常に一定の力で作用しているわけではない。本論文ではこれらをどのように組み合わせて自分の表現として生み出すのかについて検証していく。今回の研究ではこの三つを連結する形として、漆の艶という素材性を生かし、水の形と合わせている。漆の艶の奥深い特徴と水が奥深い何処かの世界と繋がっているように見える特徴、そして水を通じてどこかの世界に移動したいという自分の考えを繋いで一つの作品として生み出したのである。「媒介する漆」という独自の表現を創出し、新しい領域の構築及び漆の可能性をより広げていこうとした。

第１章では、作品を中心として今の研究に至るまでの流れを述べている。今の研究に至るまでの過程をあらかじめ見つめ、その中から自分の関心要素を客観的に認識するためである。第１章は三つの節で分けられているが、「１−⑴造形的な美しさから装飾的な美しさに」では学部の頃の考えを三つの作品を中心に記述している。最初は漆の造形的な美しさを作品から生み出そうとしていたが、だんだんと漆の装飾的な要素に魅かれる自分を発見する。「１−⑵装飾的な美しさを極めるための技術を高める」では、大学院に進学してからの作品を紹介しているが、漆の装飾的な魅力を最大限に発揮させるために技術を習得する時期である。学部から大学院までの過程で無意識的にダブルイメージの要素を作品に取り入れる自分を発見する節でもある。「１−⑶ダブルイメージから始まる研究」は、ダブルイメージを意識し始めた頃の研究内容として、まずダブルイメージを的確に理解するために資料調査などを通して検討を試みた節である。ダブルイメージの概念を元に私の考えを表現するには、自分の思想についてもより詳しく見つめる必要性を感じていたため、第２章では自分の思想について主に述べている。第２章ではまず「２−⑴ジャメビュ的思想から見る自分の作品」において、自分が考える面白さである「ジャメビュ的思想」について述べている。ジャメビュとは、身近に感じていた要素がいきなり不慣れに感じる不思議な現象を表す用語であるが、私はこのような現象

に面白さを感じる。そのために、ジャメビュ的思想のようなエンタテイメント的な要素を作品に取り入れたいと主張する節でもある。今回の制作にあたって無意識的に水をモチーフとして制作を行っていた。なぜ、水という要素を選択して制作しているのかを考えたのが「２−⑵自分にとっての水」である。ここでは、自分が水に対して抱いてきた考えを中心に論じた。このように、２章では自分の考えや思想を中心にこれからどのような作品を制作していくかについて述べている。私は何かとの接着剤の役割をしたり、平凡な板にあるテクスチャや文様を着せたりすることができる漆が「媒介」と密接な関係を持っていると考えた。媒介という用語は二つの間に立って両方を繋ぐことをいう。このように何かを繋ぐ要素としての漆を用いて、自分の作品においても二つの要素を繋げようとしている。１章でダブルイメージの領域として表現しようとした自分の作品がダブルイメージという概念では考えをはっきりと伝えることが難しい部分もあり、表現しようとする考えが媒介という概念により近いということを認識し始める。３章の⑴「ダブルイメージと媒介」ではまず、ダブルイメージと自分の作品を具体的に比較比べしながらダブルイメージでは自分の考える表現を伝えることが難しいことを説明した後、自分の作品は他でもなく媒介として成立することを述べていく。そして「３−⑵自作品から見る媒介」では改めて自ら媒介という領域であることを意識したうえに制作された自分の作品について詳しく説明している。そして最後の章である第４章では、第３章で考える媒介を取り入れた自分の作品をインスタレーションの作品として新たな展開を試みる。「４−⑴１章から３章までの考察」では、新たな展開にあたって今までの制作や研究内容を振り返って、改めて問題を意識すると共に、それをインスタレーションの作品として生み出すことを試みる。私は溜まった水が奥になにか存在するように見えたり、引き込まれそうなイメージを持つことが、漆の艶が持つ特徴と似ていると考えていたため、水を表現するには黒漆の艶が一番効果的に自分の表現を引き上げると考えた。そのような考えを「４−⑵の自分が注目する漆の特徴」では、水と漆の艶をどのように組み合わせて表現するかについて述べる。最後の４−⑶「制作工程」ではインスタレーションの作品である「海市」という作品の制作工程を、記録写真を交えながら記述している。漆の基礎工程である下地から塗り、そし艶上げの工程を自分の作品制作工程を通じて紹介している。

この 3 年間自分は、自分にとって漆は表現なのか道具としての存在なのか悩んでいた。この二つの違いは、「表現」は素材の特徴に焦点を置いて、素材そのものが表現になっている反面、「道具」は漆がその形を表すための手段としての存在であるということである。今回の研究では、漆の艶から感じる無限の空間性や巻き込まれそうなイメージを自分が水に持つ思想と媒介させて表現することで、自分が考える思想をより効果的に表すことが可能となった。つまり、この研究を通して自分が出した結論は自分の中での漆は表現であるということである。

審 査 結 果 の 要 旨

博士課程本審査における作品展示では、博士課程で取り組んだ作品の中から論文内容とよく対応する作品５点を選んで、作品の変遷をたどるように展示された。

これらの作品群では、氏が普段から特別な思いを持っている水を重要な要素として取り入れている。二つの状況（イメージ）を滑らかに繋ぐために水のイメージを媒介として用いている。言い換えると、身近なもの同士を水で媒介させ、そこに新たなジャメビュ的感覚をもたらそうとしているとも言える。

本審査展示作品の中で最も立体的な作品である『A Fanciful Maind』では、それぞれ違う角度から受ける異なる印象を共存させた作品である。この作品は、一つの物体でも、角度を分けて表現すれば、最初に受けた印象から次々に違うイメージを楽しむことができると考えて制作したものである。初期の作品『Mirage』と近作の『A Fanciful Maind』は、合わさっている二つの要素も似ているし、蒔絵や螺鈿での表現方法も似ている。しかし、複数の視点を用いることで作品のイメージや印象は全く違っている。今回、展示された作品の制作を通じて、表現したいイメージを効果的に見せる方法を確立したことが大きな成果だと言える。

本審査の展示会場にインスタレーション形式で展示されたのが、審査に向けて新作として制作された「海市」である。大小の漆黒の艶やかなパーツ約８０個が床面全体に配置され展示空間全体を作品化する試みである。水が持つ奥深いイメージと漆素材が持つ底知れない印象という二つの要素を媒介させた作品である。これまでの工芸的作品の概念を自ら飛び越えて、漆で表現した「水」の中に鑑賞者が吸い込まれそうになる錯覚を呼び起こすという体験型インスタレーションへと昇華している。

提出作品においては、余白の意識、水の造形等に更に追求の余地が認められるが、今後、漆の独自の魅力を生かし、水の表現による媒介イメージの研究が進められることにより、今後のさらなる飛躍が期待できる。論文に関しても制作に伴う博士論文として十分な水準に到達しているものと判断された。本審査結果としては、審査員全員一致で、呉帝彦氏の博士（後期）課程　本審査を合格と判定する。

＜論文指導教員氏名：深谷訓子　所見＞

呉氏の博士号審査の対象となった論文部分、「漆素材を生かした媒介イメージ」は、彼女の制作の展開に沿って、制作における問題意識と、そうした自らの関心を制作に還元していくための考察を述べたものである。全体としては、思いがけない発想や「見立て」的な面白さを伴った表現ということに惹かれる自身の傾向を出発点とし、それを漆という素材とどう関連づけ、如何なる表現領域を開拓していくのかということを論じたものである。まず第一章でとくにダブルイメージという観点からそうした自身の志向性をまとめ、第二章においては、自身が制作において重視する要素として、ジャメビュと名付けうる感覚を呼び起こすことと、水という馴染み深くも神秘的なモチーフについて紹介する。ジャメビュ的感覚と水というモチーフは、一見関連のない論点を扱っているよ

うにも見えかねないが、これら両者を同一章で扱うことにより、水という要素の遍在性と神秘性が、見慣れているはずなのに初見であるかのような感覚を与えるというジャメビュの感覚と高い親和性をもつということに注意を喚起することになっている。第三章では、自身の目指すイメージの多重性が、必ずしも従来的なダブルイメージとは一致しないことを指摘し、ダブルイメージを成立させる要件をかなり分析的に検討したうえで、自分の制作が目指すイメージの重なり方は、むしろ「媒介」という概念を用いて説明されうるものだとして、「媒介」という彼女の制作の核となる概念について述べられる。そして、第四章では、これまでの自作に対する反省的な思考を経て、説明的な状況を排除し、状況の「媒介」だけを抽出して作品とすることにした経緯が述べられる。その際、新たに検討の俎上にあがってきた要素には、余白や、漆のつやということがらが含まれ、それらを踏まえて制作された「海市」の制作工程と過程での工夫について詳述される。

このような構成をとる呉氏の論文は、自身の制作上の関心とその展開、背景として踏まえている事柄などについて、客観的かつ分析的に論じており、彼女の作品の理解に資するものといえる。漆工作品の先行例の吟味検討が量的にみてやや物足りないが、ひとまとまりの制作が終わるごとに批判的・客観的に自作を検討し、最終的に今後の彼女が長期にわたって応用と工夫を凝らしていけるであろう展開の可能性に満ちた表現テーマに到達できたという成果や、そのように制作をめぐる反省的な思考を積み上げてきたことによって彼女自身がその表現の可能性に十分に自覚的であること、制作者としての自覚の高まりが論文からも看取できる点などは、本論文について評価すべき点であろう。